



かえって来てよかった

〈岡山県〉和田 京子 40歳

看護学校を卒業し、3年間、精神科で

看護師として働いた。その後は、看護とは全く違った仕事、牧師として働いていた。牧師の仕事を辞めた時、迷った。看護の仕事を再びしようか。しかし、13年間というブランクは大きい。体力面、技術面……。心配要因は多かった。そんな時、看護学校の先生が後押しをしてくれた。

「大丈夫、先生は15年のブランクだったのよ！」という言葉に励まされ、私は思いきって看護師として内科病棟に勤務するようになった。

だが技術面、治療方法、薬剤など、分からないことだらけだった。私は忙しさで不安の中で過ごしていた。仕事ははかどらず、迷うばかりの私だったが、ある時、モニターもついて、いつお亡くなりになっても不思議ではない患者

さんの家族から声を掛けられた。

「おじいちゃん、スイカが大好きだったのです。死ぬ前に一口でいいから食べさせてあげたい」

その患者さんは絶飲食で点滴を行っていた。希望をかなえてあげたいが、どうしよう。医師の指示をもらい、私は口腔ケアの時、ガーゼで口腔内を湿らせて汚れを取り除いていた要領で、スイカの汁をガーゼに含ませてそつと患者さんの口の中に入れてみた。すると、目を閉じて過ごすことが多かった患者さんがパチッと目を開けて言った。

「うまい！……うまい……うまいなあ」

小さな声だったが私も家族もびつくりだった。

それから幾日か後、患者さんはお亡

くなりになった。家族は、わざわざ私を見つけて伝えてくれた。

「あの時、してもらったことが忘れられません。悔いが残らずよかったです。ありがとうございます」

私は、涙があふれた。たとえ、寝たきりであっても、終末期であっても、人として生かされていることへの援助を行うことができる看護は、人々に感動という幸せを届けるのだと実感した。看護の仕事にかえってきて良かったと思つた時だった。